万国外科学会（ISS/SIC）日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会(ISS/SIC)日本支部
〒213-8507　神奈川県川崎市高津区溝口 3-8-3
帝京大学医学部附属 溝口病院外科
TEL：044-844-3333(内線3223) FAX：044-844-3222
発行者：山　川　達　郎
編集責任：万国外科学会(ISS/SIC)日本支部広報担当委員・村田宣夫（帝京大学溝口病院外科）
印刷：株式会社 dig　TEL:03-3551-3060
年２回発行1995年4月創刊

ご挨拶

慶應義塾大学医学部
医学部長・外科教授
President ISS/SIC
Congress President ISW2007
北島　政樹

第42回万国外科学会の開催までもう半年を数えるようになりました。昨年10月にはシカゴに於けるACSの際に理事会が開催されました。

その時の大きな課題はスポンサーシップとプログラムでありました。理事会直前にDr. Harder、Mr. Bertschiと事前打合せを行い、理事会に臨みました。カナダのLOCはスポンサーは殆どが会長の努力によらず、Opus 3というコンベンション・サービスに業務の殆どを委ねている事が分かり、会長の立場として早くからスポンサーを集めておいてよかったと思っております。Mr. Bertschiも理事会の最中に小生に対する謝辞を述べてくれました。

プログラムも３月17，18日のミュンヘンの理事会で最終決定になりますが、日本から多くの参加者を望むならば、出来るだけ日本の人々に司会を担当してもらうのが良いとアドバイスをし、司会候補者のリストを事前に事務局にメール致しました。

さて、2月初旬にボストンでNEJMの編集委員会が開催され、日本への帰途に、モントリオールを視察してまいりました。当日は摂氏－15℃と日本で経験したことのない寒さでしたが、コンベンションセンターは非常に機能的な構造になっており、その周囲にはインターコンチネンタルホテル、デルタホテルなど徒歩数分の場所に位置しております。また、セキュリティーも前回のダーバンに比較すれば全く問題なく、安心できました。

会長招宴も学会場の近くの博物館あるいは、丘の上にある由緒ある建築物にするか迷うところですが、トランスポーテーションさえ良ければ、モントリオールが一望に見渡せる丘の上が魅力的であり理事会で提案しようと思います。

いよいよ準備も佳境に入っておりますが、8月下旬のモントリオールは1年で最も気候がよく、緑の葉が突然紫がかった色に変わり、市内の雰囲気も一変すると聞いております。また、同時期には多くのフェスティバルもあり、外科学のみならず多くのモントリオールの文化を楽しめると期待しております。

皆様お誘い合わせの上、是非ご参加をお願いいたします。

万国外科学会日本支部会と共に経験した過去30年間の想い出と将来への期待

ISS/SIC Japan Chapter,
National Delegate
帝京大学医学部名誉教授・客員教授
山川　達郎

ISW；International Surgical Week に初めて参加したのは1977年、英国のSir Holmes-Sellorsを会長として京都で開催された第27回International Surgical Week の時でした。その時の発表は後に機関誌であるWorld J Surgeryに掲載されましたので、私にとっては大変に想い出深いものがあります（Yamakawa T, Komaki F, Shikata J：Experience with routine postoperative choledochoscopy via the T-tube sinus tract.World Journal of Surgery 1978 2:379-85）。その時に感じたのは、1902年に発足したISS/SICは、長い歴史の中で培われた輝かしい伝統をもち、他に例をみない格式の高い学会であると言うことでした。歴代会長のお名前を見ても19世紀、現代医学の基礎を作られた偉人のお名前をそのlist の中に見ることができます。早速、その時のLocal Organizing Committee（LOC）のPresidentであられた恩師でもある故斉藤　淏日本医科大学名誉教授に推薦状を書いていただいて入会させていただいたのが1979年でありました。

以来、この会を大切に、できるだけ参加するように努力してまいりましたが、何よりもこの学会に深く関与させていただくことになったのは、当時、ISS/SICのCouncilorを経てPresidentを務められていた出月康夫東京大学名誉教授とISS/SIC日本支部長を経て,後にExecutive Councilを務められた比企能樹北里大学名誉教授や多くのCouncil memberのお引き立てにより、1997年、ISS/SIC日本支部事務局長を拝命してからであります。そして2000年からは日本支部長にご指名いただき、以来本部との事務的なやり取りも多くなり、今日まで色々と貴重な素晴らしい経験をつませていただきました。

在任中の思い出としては、色々なことがありました。まず前述したように事務局長に任命された時には、出月康夫教授は、timingよく、ISS/SICのCongress Presidentを経て 1995年から1997年までPresident をお務めで、いろいろと直接、ご指示をいただくことができましたので、大変心強かったことであります。ことに出月教授からは、多数の要人をご紹介いただき、また先生の会議の運営法や発言法などについてもつぶさに勉強できて、後の日本支部長としての仕事に大変役立ったことであります。多分、それなくしては、私などは到底、何もできなかったのではないかと今更のごとく思い出されます。また第38回ISW（1999年）においては石川浩一東京大学名誉教授が故斉藤　淏日本医科大学名誉教授に次ぐ日本人としては二人目の名誉会員になられたこと（比企能樹：万国外科学会日本支部ニュース第9号）や、また北島政樹教授が ISS/SIC 創立100周年記念に当たる2001年のBrusselでのISW で、世界で21番目に当たるGrey-Turner Memorial Lecture の演者に選ばれ、記憶に残る素晴らしいご講演なされたことも忘れることができない想い出です（山川達郎；万国外科学会日本支部ニュース．第13号）。さらに出月康夫東京大学名誉教授が、SARSにより幻のISWに終わった2003年BangkokでのISWで日本人３人目の名誉会員に推挙され、推戴式がISW2005 - Durbanでおこなわれたことや、北島政樹教授が2005年のDurbanでのISW で、ISS/SIC の会長に就任され、2007年のMontreal ISWのpresidentをお務めになられること、そして1999年から開始したISWの本邦への誘致運動も実を結び、2011年にはいよいよ横浜で開催することが決定したことなどが走馬灯のごとく想い出として脳裏を駆け巡ります。いずれもその刹那、刹那に出月康夫先生、比企能樹先生、北島政樹先生らのお力添えをいただきながら何とか職務を全うしてきました。またこの期間中にあって忘れてはならないことは、ISS/SIC のIntegrated Societies一つであるIAES (International Association of Endocrine Surgeryにおいては、野口記念病院の野口志郎先生が、またIASMEN（International Association for Surgical Metabolism and Nutrition）では、大阪大学 岡田　正名誉教授が、それぞれpresidentをお務めになられ、会を主催されるなど大変なご活躍をなされたことであります。機関誌のWorld J. Surgeryでも、阿部令彦慶應義塾大学大学名誉教授、出月康夫東京大学教授、高木　寛名古屋大学名誉教授、戸部隆吉京都大学名誉教授や故 馬場正三浜松医科大学名誉教授が editor としてご貢献くださいましたし、また現在は北島政樹教授をはじめ、上西紀夫東京大学教授、二村雄次名古屋大学教授、嶋田　紘横浜市立大学教授、高見博帝京大学教授らがご活躍中であることなどが、日本支部の発展に多大の影響を与えてくださったことであります。日本支部の活躍がExcecutive Council Meetingで話題になるほどまでになったのは、ここにお名前を挙げさせていただいた諸先生に加え、日本支部本支部を支えてくださっている会員の皆様が、ISS/SICに目を向けられて活動してくださったお陰です。ここに支部を代表して、皆様に心からの感謝の意を表する次第であります。ありがとうございました。

その他、北島教授がCongress Presidentをお務めになる本年の８月に開催のCanada MontrealにおけるISWにおいて、不肖、私が、Prof. Leigh Delbrigde, Sydney, Australia、Prof. Andre Duranceau,と共にVice Presidentを務めさせていただくことになっていることであります。このような栄誉ある機会は、ISS/SIC President, 北島教授のお計らいなくして浴することは不可能なことで、大変身の引き締まる思いがしています。北島教授に深甚なる感謝の意を表するともに、会員の皆様のご理解とご協力に心より感謝申し上げます。私のISS/SICに対する最後のご奉仕と考え、最善を尽くす所存です。よろしくお願い申し上げます。

さて、前回のISWでのCouncilor MeetingにおいてNational Delegateの任期は４年、１期に限定するということが決まりました。私が支部長を拝命してからすでに７年が経過してしまったことになります。前回の日本支部会で、2011年に横浜で開催されるISWのLocal Organizing Committee（LOC）のPresidentに渡辺昌彦北里大学教授が選出されたこの機会に、日本支部も役員

（２面へ続く）

を改選して新体制を築いて運営していく必要があるのではないかと考えています。今こそ、若い力を結集してISW 2011 の成功と日本支部の更なる発展を期す絶好の機会と考えるからであります。北島教授のPresidentの任期が終わるISW2007終了時にあわせ、私も退任させていただきたいと北島教授には内諾を得ているところでございます。事務局の移転は、ISW2007前に慶應義塾大学の方に移管する予定でありますので、よろしくご理解の程をお願い申し上げます。

最後になりましたが、これまで賜りました日本支部会員の友情とご協力に対して心より感謝申しあげると共に、日本支部の益々の発展を心より祈念申し上げます。私も会員の諸先生と共に、微力ではありますが、引き続き日本支部の活動をご支援申し上げる所存です。

2011年横浜総会開催決定までの足どり

ISS/SIC前理事
比企能樹

本棚を整理している時だった。厚いファイルの中から落ちたパンフレットは、ヨコハマの港から見た富士山をカラーで写したものである。たちまちの内に、1993年に香港で開催された第35回ISS/SIC世界大会のあれこれが、走馬灯のように思い出された。

この香港総会の開会式直前に、その時に理事であった出月康夫先生と日本支部のNational　Delegateの私は、「1977年の京都開催以来、時間がたっているので、そろそろ日本へ再度誘致をしてもいい頃合だね」と話し合った。開催地は何処にするかについて、出月理事はやはり大きな国際学会を受け入れるには、海外での知名度もある京都が一番外人に好まれるのではと言われた。しかし私の頭の中では、そろそろ京都ばかりでなく他の都市で、つまり国際会議センターが建って開発の緒に就いた“横浜みなとみらい21”へ誘致してはどうかという考えが芽生えた。

当時は、携帯もなく、またメールなどITも技術がなく、僅かにFax位が近代機器であったので、香港から国際電話で横浜コンベンションビュローに連絡をとった。当時、ここには、森岡朋子さんという英語がネイティヴ実力派の女性が居て、直ぐにできたばかりの横浜国際会議場のパンフレットと横浜グッズやヨコハマとかいた団扇を、大量に香港の会場まで送ってくれた。その素早い手並みは感嘆に値するほどであった。

しかし、後にW杯サッカーの開催地でようやく「ヨコハマ」は世界に知られたものの、当時はISS/SICの理事などには「？」という感じであったことは否めない。1995年出月先生が日本人で初めてこの学会の会長になられ私が理事に昇格し、日本への誘致を行うことになった。折からタイ・バンコクが立候補し、大人数の運動員を理事会の度に送りこんだり、Post graduate programをもタイで開催を企画、ISS/SIC首脳部を現地に招たりの誘致活動により、遂に2003年はタイ・バンコクと決まった。そのため5大陸の各都市で開催するという、五輪にも似た方針であるためにしばらくはアジア開催が不可能となった。しかしバンコク総会は、SAASという伏兵の出現により、あの猛運動の結果勝ち取った開催を感染の危険のために断念せざるを得なくなったことは記憶に新しく、どんなに口悔しかったことであろうかと、何とも同僚のタイの理事にはお気の毒以外の何物でもなかった。

思えばそこまでの日本誘致は、援軍のない一人相撲であったが、その後私自身が役員となったわが国のコンベンション誘致機構JUNTOの制度に働きかけ、ISS/SICの首脳部を横浜会議場周辺の視察に招いたり、後任の日本代表の山川達郎先生の支援もあって、着々と誘致運動をし続けた。

その年には、本来バンコクで開かれるはずの理事会もシカゴで開かれて、通常は華やかな総会の壇上で委譲されるはずの、ずしんと重い会長メダルが、会場のホテルの一室でSir Peter Morris会長の手から、ドイツのSiewert教授の胸にかけられた。ISS/SIC史上初めての総会キャンセルという事態を、改めてそこに居た理事たちは苦い思いで噛み締め、何とも言いえぬ複雑な理事会であったが、暗黙の内に理事たちの胸に、次回はアフリカで頑張ろうという思いが去来した。

われわれにとって最大の成果は、念願の2011年ヨコハマ開催が、この理事会で内定されたことである。私は当時体調を崩し足背に多発した深い潰瘍が激痛を起こして車椅子で移動するていたらくであったが、満場一致の決議が決まったとき、脚の痛みが一瞬すっかり取れ思わず立ち上がって全ての理事に感謝の握手を求めたのだった。

特別寄稿

海外施設見学行のススメ

昭和大学医学部藤が丘病院
外科教授
真田　裕

第42回日本小児外科学会で千葉大学大沼直躬会長は「海外留学を目指す若者へ」と題するセッションを企画された。今後の小児医療を支える若い医師に海外留学を経験させたいという趣旨であった。小児外科のリーダー数人が彼らの留学経験を披露され、講演内容は「小児医療にみる医学留学へのパスポート」（はる書房）に纏められた。あらためて読み直してみると何れの留学記にも先々独自の工夫が有り、その底流には海外で学んで視野を広げようという筆者達の強い意志が窺える。

私は外科学一般研修を経て1975年に順天堂大学小児外科に入局した。本邦小児外科学の泰斗駿河敬次郎教授をはじめ当時の小児外科教室の指導者はいずれも留学経験を通じて優れた業績を上げられ、医局員を指導されていた。諸外国からのビジターも多く、国際交流の雰囲気が濃密にあった。しかし留学に関しては慎重で、希望者が留学先の生活に適応できるか否かを確認したうえで許可したいと考えられていたようで、平井慶徳助教授（現昭和大学教授）は夏期休暇を利用して留学したい海外の施設を見学することを勧められていた。

私は医学生時代に国立王子病院渋沢喜守雄先生の実験を週一回お手伝いさせていただいた。実験後に夕食をご馳走になりながら先生のお話を伺うのが楽しみで毎週通った。渋沢先生はスライドを交えて米国の救急医療や研究体制の素晴らしさを語られ、私の心に留学の希望が芽生えた。1978年の夏に同期の高松英夫先生（現鹿児島大学病院長）と米国の３施設を見学することにした。順天堂への留学生Dr.Quintero,Dr.pallaresの母校のコロンビア・ボゴタ市ロザリオ大学病院をまず訪ね、そこからニューヨークSloan Kettering癌センターで小児癌治療を、Ann Arborミシガン大学Mott小児病院で新生児外科の栄養管理を見学し、最後にロスアンゼルスでUCLA小児外科とロスアンゼルス小児病院を訪ねよう、と計画した。二人で手分けしてExcelby、Coran、Fonkalsrud各教授に手紙を書き、平井先生の紹介状を添えて施設を見学したい旨を伝え、日程を調整した。Coran教授にはAnn Arborのホテルまで予約していただいた。これは二人にとって初めての海外旅行で、観るもの聞くことすべてが新鮮であった。ボゴタでは研修医仲間のpartyで朝まで飲まされて二日酔いに悩み、ニューヨークではタクシー料金をぼられ、ロスアンゼルスではホテルで同性愛者に間違われてダブルベッドの部屋を提供されかけ、などなど今でも旅の興奮を鮮明に思い出す。しかし今思い返してみると、一番勉強になったのは訪れた施設との手紙のやり取りであった。また、米国には見ず知らずの外国の若者でも同じ道を志す後輩として温かく迎えてくれる土壌があり、研修医が高名な教授を訪問することを躍躍する必要はないことを知った。

その後、私たちはUCLAに留学の機会を与えていただいた。この旅行によって既にFonkalsrud先生とは見ず知らずの間柄ではなく、fellowのポストをお願いする手紙を書くことに戸惑いはなかったのである。私たちの経験から、見学旅行は若い研修医にとって比較的敷居は低く、その後の留学を成功に導く良い方法であると考えている。

特別寄稿

北里大学医学部　外科教授
渡辺　昌彦

万国外科学会は1902年にKocherによって創設された最も歴史ある国際学会であります。このように伝統ある第44回ISS/SICをお世話させていただくことになり、会員の先生方に心より感謝申し上げます。また本会を日本に誘致するにあたり、ご尽力賜りました会長の北島政樹先生、前会長の出月康夫先生、顧問の比企能樹先生、日本支部長の山川達郎先生をはじめ諸先生方にはこの場をお借りして深甚なる感謝の意を表します。

20世紀末に開花した外科学を総括し、今世紀の外科学の動向を発信し、新しい発展の礎を築く上で本学会を日本で開催することは極めて意義深いと考えます。 外科学は、解剖学に基づいた治療手技にともなう侵襲、代謝・栄養、創傷治癒に関連した様々な病態を科学する学問であります。人為的に外傷を与えながら疾患を制御する外科学にとりまして、当初は麻酔学と感染制御の進歩が不可欠でありました。疼痛管理と感染制御は手術手技のバリエーションを広げ安全性を高め、多くの手術の基本的手技は20世紀末にほぼ確立されました。代謝・栄養学の発展は外傷や熱傷の治療成績を向上させ、とくに経管・経腸栄養の導入は消化器外科学や小児外科領域において現在では必須の治療法となりました。また外科解剖や創傷治癒の理解は手術手技の向上をもたらし、外科治療における患者のQOLを向上させました。

本学会は一般・消化器外科を中心として、これらの外科学の基礎を網羅した国際的な学会であります。 本会のように外科学を横断的に議論する場は、えてして内容が希薄になりやすい欠点があります。しかし、例年プログラムが同じ研究領域に重ならないように配慮されており、専門外領域の動向を知る上で参加者には好都合といえましょう。世界中から結集した専門家によって議論が行われ総括に導かれるならば、研究領域を越えて参加者は楽しく知識を吸収できることでしょう。また、このように開かれた学会は若手外科医が海外の外科医と、学問的かつ文化的交流を深める良いチャンスであります。これこそ国際学会の醍醐味といえます。外科学を科学し次代の地平を拓く気概を、全ての参加者がもてる国際学会が求められております。我が国からは日本外科学会をはじめ関連諸学会の参画がなければ、横断的な本会を理想に近づけることは不可能であります。関連諸学会の先生方にはこの点をご理解賜り、ご協力のほど切のお願いする次第であります。

Billrothの言葉に「過去と現在におけるartとscienceに精通した者のみ、その発展を推進する資格がある」があります。その言葉にかなった幾多の先達の並々ならぬ努力が、今日の外科学の隆盛を招いたに違いありません。この言葉を踏まえ、本会を成功に導く決意にございます。会員の先生方の尚一層のご支援を賜りますことをお願い申し上げます。

特別寄稿

国際学会の思い出

広島大学　内視鏡外科学講座　教授
岡島　正純

国際学会について語れば、枚挙に暇のないほど様々なエピソードがあります。多くは失敗談ですが、忘れられないのがお世話になった諸先生のことです。

私が初めて海外の国際学会に出席したのは1995年、外科医になって14年目のことです。それまで海外に行かなかったのには二つの理由があります。一つは単に億劫だったこと。海外留学経験がない上、元来面倒くさがり屋の性分で海外渡航にまつわる様々な雑事が面倒だったのです。もう一つは大の飛行機嫌いだったこと。いずれも、今の自分をご存知の方には想像もできないと思います。しかしある先輩のお陰でその殻を破ることができました。それは教室（広島大学第2外科）の先輩、田中恒夫先生（現島根大学消化器総合外科学教授）で、様々な段取りを手取り足取り手ほどきしていただき、総勢7名のツアーに参加することができました。学会はSandi egoで行われたDDW（米国消化器病週間）で、消化管運動生理に関するポスター発表をする後輩、小島康知（現内視鏡外科学講座講師）の付き添いという名目です。おりしもヨットのアメリカズカップが行われており、UC Sandi egoに留学していた教室の後輩、伊藤敬先生（現長崎大学医学部生化学教授）に案内してもらいながら、つかの間の西海岸を満喫しました。そして何より感動して、認識を新たにしたのは学会そのものに関することです。その規模の大きさもさることながら、文献でしかお目にかかったことのない著名な先生がポスターの前にふらりと現れ、含蓄のあるコメントをいただいたり、日本ではそばにも寄れない先生方が気軽に声をかけてくださったり、何だか自分もその先生方と同じレベルになったと勘違いしてしまうほどでした。滞在中、航空チケットのreconfirmation、レンタカーの予約とクレーム、「米国の夜は怖いのでワンブロックでもタクシーで移動しよう（今思えば少しオーバーですが）」というアドバイス等々、まさしく親鳥のごとく甲斐甲斐しくお世話いただいた田中先生の苦労も忘れて、海外学会のリピーターになる決意をしたのでした。

2004年、その年は秋のACS（米国外科学会）出席を決め、夏のEAES（欧州内視鏡外科学会）はどうしようかと悩んでいました。そのような時期、突然、丸山圭一先生からあるお誘いをいただきました。それまで一面識もない私（当然私は存じ上げておりましたが）をお誘いいただき、甚だ恐縮するとともに驚いたというのが正直な気持ちです。しかし何故と思う前に夏のEAESはやめて、5月のこの企画に参加させていただくことを決めました。それはドイツ外科学会出席に絡めて著名な外科医を訪問しようという非常に魅力的な企画でした。願っても叶わないような企画が、降って沸いてきたのです。さらに驚いたのがこの企画は全て丸山先生ご自身が段取りされて、出席者全員との連絡、旅行社や滞在先とのやり取りを全てお一人でされていたということです。変更や新たな連絡のために詳細で丁寧なお手紙が何通も届きました。ツアー中は「時差ぼけ防止に」と一日ごとにきれいに分封された眠剤等をお渡しいただき、訪問先（特に手術室）での礼儀、交渉から急な段取りまで、微に入り細にわたる気配りでお礼の言葉もないほどでした。StrasburgのMarescaux先生、RomaのHuscher先生、BerlinのKraas先生の病院、研究所を訪問して最新の研究と卓越した手技を勉強するとともに手厚いおもてなしを受け、MunichのSiewert先生、現地で合流した比企能樹先生とは楽しい会食を共にすることができました。丸山先生でなければ実現しない企画であると確信しております。帰国して、そう言えば故大上正裕先生がこのツアーに出席されたことを話しておられたなあと思い出しました。丸山先生に御礼を申し上げると、「今度は先生が企画して若い人を連れて行きなさい」とのお言葉をいただきました。お言葉に甘えてこのご恩は若い人に返させていただこうと思います。

2006年のEAES(Berlin)では数名の大学院生と出席し、彼らは北島政樹教授にお言葉をいただき直立不動で聞いていたことを思い出します。雲の上から降りてこられたという心境だったようです。諸先輩の恩に報いるべく、本年8月のISS/SICをはじめ、若い人の国際学会出席への道をサポートすることが私共の務めであると肝に銘じて頑張っていきたいと思います。

第23回　万国外科学会（ISS/SIC）日本支部総会　議事録

2006年11月10日金曜日　7時30分～8時15分
全日空ホテル 広島　　出席者37名

議　事

①支部長挨拶　　山川達郎
②万国外科学会会長挨拶　北島政樹
1) Executive Council Meeting at Chicagoの報告
一般演題とposterの査読委員とModeratorの推薦
*日本支部: 会員の中から45名を推薦
2)Prize Winner, Honorary Memberの推薦
*日本支部: 比企能樹先生former Executive Council推薦
③ISS/SIC報告討議事項
1) International Surgical Week ISW 2007 in Montr_al, August 26 to 30, 2007
Congress President; Masaki Kitajima, Yokohamna, Japan
Congress Vice Presidents;　Leigh W. Delbridge, St. Leonards, Australia (ISS/SIC)
Tatsuo Yamakawa, Tokyo Japan (ISS/SIC)
Paolo Miccoli, Pisa, Italy (IAES)
Ronald V. Maier, Seattle, USA (IATSIC)
Peter B. Soeters, Maastricht, Netherlands (IASMEN)
Polly Cheung, Hong Kong, Hong Kong SAR (BSI)
2) The dates for ISW 2009 in Adelaide are confirmed to be September 6 to 10, 2009.
3) Annual Due； Eur.135.00 for ISS/SIC Membership including the subscription to World Journal of Surgery in 2007and Eur. 40.00 for the Chapter Assessment for the year 2006.
4)Natinal Delegate 任期改定；４年１期；に伴うNational Delegate 選出と事務局移転
5)Membership application on-line 登録システム開始: 詳細ISS/SICホームページ参照
6)日本支部昨年会員増加数No.1
④ Integrated Societies，関連国際学会の報告

浅原利正	荒木靖三	池口正英	出月康夫	宇山一朗
海野倫明	冲永功太	加藤抱一	金子弘真	加納宣康
川原田嘉文	北川雄光	北島政樹	北野正剛	窪田敬一
熊谷一秀	後藤満一	小西敏郎	小山　勇	佐々木純
砂川正勝	高見　博	田尻　孝	田中雅夫	梨本　篤
野口志郎	林　四郎	前田耕太郎	幕内雅敏	真辺忠夫
丸田守人	水本龍二	門田守人	矢永勝彦	渡辺昌彦

（敬称略、五十音順）

事務局：山川達郎　村田宣夫

会員動向（2007. 4）

会員数	363名	
内訳	アクティブメンバー	329名
	シニアメンバー	31名
	名誉メンバー	3名

支部活動報告

2006. 6.　万国外科学会スイス本部へ寄付（1,500 us$:2006年分）
2006. 11.10　第22回万国外科学会（ISS/SIC）日本支部 総会（於：広島　全日空ホテル）
2006. 11.　万国外科学会（ISS/SIC）日本支部ニュース第23号発行
2007. 4.11　第23回万国外科学会（ISS/SIC）日本支部 総会（於：大阪国際会議場）
2007.　4.　万国外科学会（ISS/SIC）日本支部ニュース第24号発行

ISW2007と関連学会のお知らせ

ISW 2007 ;会期2007年8月26日～30日、Montreal, Canada
American College of Surgeons; 会期；2007年10月7日～11日、New Orleans

ISS/SIC日本支部は、1999年からISWの本邦招致運動を展開してきましたが、競争相手も多くてなかなか決まらないできました。この度、ISS/SICの現Presidentである慶應義塾大学教授の北島政樹教授のお力でやっと2011年に横浜で開催されることが決まり、Local Organizing Committee（LOC）のPresidentに渡辺昌彦北里大学教授が選出されました。ご同慶に耐えません。是非、成功させて欲しいものと念願しています。

そのためには、⑴ISWには特殊な運営方法（山川達郎；万国外科学会日本支部ニュース　第22号）がありますが、会員の皆様には、Montreal（2007）と Adelaide（2009）でのISW には是非参加していただき、その運営を見ていただきたいと思います。また⑵例年ACS時、ISS/SICのExecutive Council Meeting が併催され、ISS/SICの役員や事務局からも何人かの人が毎年参加しておりますので、ACSは最適な情報交換の場でもあります。ACSへの会員の積極的な参加を期待しています。

ISS/ SIC Genral Assembly 2005から

President-elect 2005 - 2007 ; new ; Micheal Sarr, Rochester, USA
Secretary general 2005 - 2009; old ; Felix Harder, Switzerland
Information and Confirmation of Officers
Past President of ISS/SIC 2005 - 2007 ; J. R. Siewert, Geramny,
Coucilors 2003 - 2007 ; A. Csendes, Chile
President of ISS/SIC and Congress President ; M. Kitajima, Japan

Election of Congress Vice Presidents ISW 2007 （one term）
ISS/SIC Congress Vice Presidents
Leigh Delbrigde, Sydney, Australia
Andre Duranceau, Montreal, Canada
Tatsuo Yamakawa, Kawasaki, Japan

Integrated Societies Congress Vice Presidents
Paola Miccoli, Pisa, Italy ; IAES
Ronald V. Maier, Seattle, USA ; IATSIC
Polly Cheung, Hong Kong, SAR ; BSI
Peter B. Soeters, Maastricht, NL ; IASMEN

ISS/SIC Constitutionの変更から

Annual Dues の増額 ; 過去8年間、年会費はUS＄120としてきたが、来年度よりEuro 135に増額されることに決定
Membership ; No Medical scientist involved in medical research related to surgery may also be accepted as members.
Active member ; National Councilor の審査後、National Delegate による承認を要すること。
National Delegate ; one term ; 4 years with eligibility for one term only
Chapter ; 150人以上のactive memberが必要

2006年会計決算報告書

２００６年 収支決算書（2006年１月１日～12月31日）　ISS/SIC

日本円の部　単位;円

Ⅰ収入の部	予算額	決算額	備考
会費	1.200.000	1.136.875	＄通帳→￥通帳間預替
広告掲載料	400.000	350.000	
雑収入	0	29.000	
利息	0	100	
当期合計	1.600.000	1.515.975	
前年繰越金	824.011	824.011	
収入合計	2.424.011	2.339.986	
Ⅱ支出の部			
会議費	300.000	127.817	2回分
通信費	200.000	135.980	
印刷費	450.000	423.570	ニュースレター:2回発行
文具費	50.000	39.655	
交通費	150.000	67.975	出張旅費
人件費	150.000	170.000	
他誌広告費	0	0	
謝礼	80.000		
雑費	10.000	204.461	
予備費	60.000	0	
支出合計	1.450.000	1.169.458	
収支残高（2007年 繰越金）	974.011	1.170.528	

ＵＳ＄の部　単位；us ＄

収入の部	予算額	決算額	備考
会費	12,000.00	2,918.40	日本支部会運営費（為替経費手数料引後）
利息	0.00	31.03	
繰越金	8,426.69	8,426.69	
収入合計	20,426.69	11, 376.12	
支出の部			
日本円へ預替	10,000.00	9,860.15	日本円の部、会費収入へ
スイス本部寄付	1,500.00	1,500.00	
支出合計	11,500.00	11,360.15	
2007年繰越金	8926.69	15.97	

ユーロの部（スイス本部からの送金がユーロへ切替わったため、通帳を作成）

収入の部	予算額	決算額	備考
会費	0.00	0.00	
利息	0.00	0.00	
繰越金	0.00	0.00	
収入合計	0.00	0.00	

残高　日本円　1,170,528　円
米ドル　15,97　us＄
ユーロ　0,00　ユーロ

ISS/SIC 万国外科学会 日本支部
2007 年 2 月 26 日 監事 田中雅夫

2007年会計予算案

２００７年 予算案（2007年１月１日～12月31日）　ISS/SIC

日本円の部　単位;円

Ⅰ収入の部	予算額		備考
会費	1.200.000		外貨通帳→日本円通帳間預替
広告掲載料	400.000		
雑収入	0		
利息	0		
当期合計	1.600.000		
前年繰越金	1.170.528		
収入合計	2.770.528		
Ⅱ支出の部			
会議費	300.000		2回分
通信費	200.000		
印刷費	450.000		ニュースレター:2回発行
文具費	50.000		
交通費	150.000		出張旅費
人件費	150.000		
他誌広告費	0		
謝礼	80.000		
雑費	10.000		
予備費	60.000		
支出合計	1.450.000		
収支残高（2008年 繰越金）	1.320.528		

ユーロの部　単位；ユーロ

収入の部	予算額		備考
会費	9,500.15		入金;2007/02/16後日日本支部会運営費として日本円通帳へ
利息	0.00		
繰越金	9,500.15		
収入合計	9,500.15		
支出の部			
日本円へ預替	0.00		日本円の部、会費収入へ
スイス本部寄付	0.00		
支出合計	0.00		
2008年繰越金	9,500.15		

ＵＳ＄の部　単位；us ＄

収入の部	予算額	決算額	備考
会費	0.00		
利息	0.00		
繰越金	15.97		
収入合計	15.97		
支出の部			
日本円へ預替	0.00		
スイス本部寄付	0.00		
支出合計	0.00		
2008年繰越金	0.00		

オキサセフェム系抗生物質製剤
指定医薬品，処方せん医薬品注1)
フルマリン®
静注用0.5g・1g，キット静注用1g
日本薬局方 注射用フロモキセフナトリウム Flumarin® 略号 FMOX
注1) 注意－医師等の処方せんにより使用すること
■薬価基準収載 ■「効能・効果」,「用法・用量」,「禁忌」,「原則禁忌」,「使用上の注意」等については添付文書をご参照下さい。 ®:登録商標
〔資料請求先〕大阪市中央区道修町3-1-8 〒541-0045 塩野義製薬株式会社 医薬情報センター 電話0120-956-734
製造販売元 シオノギ製薬 http://www.shionogi.co.jp/med/
2005.6 B54